

19歳 盛岡高等農林学校に入学
25歳 農学校で教職に就く
29歳 退職し、農業を始める
37歳 死去

vol. 7

宮沢 賢治

▶▶ Miyazawa Kenji

自然を愛し、郷土を愛し、 理想の社会を思い続けた 37年

▶▶▶ 跡継ぎとして葛藤を抱えた少年時代

『銀河鉄道の夜』など数々の名作で知られる宮沢賢治は、日清戦争が終戦した翌年にあたる1896年（明治29年）、現在の岩手県花巻市で生まれた。生家は祖父の代から続く商家で、質屋と古着商を営んでいた。父をはじめ家族が熱心な仏教徒という家庭環境で、賢治は子守歌替わりにお経を聞き、仏教の教えを自然に学んでいった。

小学校ではクラスメイトの多くが農家の子で、貧しさゆえ昼食の弁当さえままならない友だちもいた。賢治の弁当は白米におかずも添えられていたが、自分だけ恵まれているのことに罪悪感をおぼえ、弁当箱の蓋で隠して食べたという。家業の質屋は、貧しい人にお金を貸して成り立つ商売。そんな家業も好きになれなかった。

盛岡の中学校に進学した賢治は寄宿舎生活を始める。2年生の時、先生の引率で初めて岩手山に登った。「南部富士」と称されるこの山のとりこになった賢治は、毎週のようにソロ登山をし、植物採取や採石に勤しんだ。

長男である賢治は、生まれた時から家業の後継者として父に期待されていた。父の思いとは裏腹に、賢治は家業が苦痛でならない。中学卒業後、実家に戻るものの、心ここにあらず。心配した父は賢治に進学を勧める。

同級生から1年遅れで、現在の国立大学にあたる盛岡高等農林学校に首席で入学した賢治は、勉学に打ち込んだ。特待生に選ばれ、教授からは教員になることを勧められた。学業のかたわら、短歌や詩が好きな仲間たちと同人誌も発行するなど、学生生活を存分に謳歌した。



1896年岩手県花巻生まれの、詩人、童話作家。化学や地質学、天文学への造詣が深く、英語やエスペラント語を身につけ、チェロも演奏するなど他分野に関心を持ち、能力を有していた。

▶▶▶ 農民にどこまでも寄り添い続け

卒業後も学校に残り地質調査などを続けていた賢治は、肺病で入院した妹の看病のため上京する。退院後は妹と共に実家に戻り、父への気遣いから家業を手伝うが、父とケンカし、家出して再び上京、アルバイトをしながら、傾倒する仏教団体の布教と童話の創作に励んだ。

家出から1年も経たないうちに、再び妹が病に倒れたとの知らせを受け、帰郷。しばらくして地元の農業高校で教職に就く。農業技術に限らず、化学や英語まで幅広い教科を受け持った賢治の授業はわかりやすく、おもしろく、生徒たちから人気だった。創作活動にも精力的で、童話や詩のほか、自作劇の上演や校歌の作詞もしている。定職に就き家族を安心させていた矢先、妹が他界した。一番の理解者を失った賢治の悲しみは計り知れない。

4年4カ月で教員生活にピリオドを打った賢治は、自ら農業を始めると同時に、農業塾を立ち上げた。貧しい農民を救うため、無料で農業相談にのり、近代的な農業技術を教えるだけでなく、農民にも心の支えとなる芸術が必要と、レコードコンサートや詩の朗読会も開いた。理想に燃えていたが、そんな生活も長くは続かない。肺病で倒れたのだ。快復後、碎石会社の技師となったのも「石灰の肥料で、不作に苦しむ農民を救いたい」という一心からだが、無理がたたり倒れてしまう。約2年の闘病の末、37年の短い生涯を閉じた。病床にあっても農民の相談にのり続けた賢治の、どこまでもやさしい眼差しは、その作品からもうかがい知ることができる。

（執筆／ライター 篠田りょうこ）